様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月２５日現在

研究種目：　若手研究（スタートアップ）
研究期間：　2008～2009
課題番号：　20820065
研究課題名（和文）　近世期における王朝物語享受ネットワークについての研究

研究課題名（英文）　The reception of tales by people at the early modern age

研究代表者
小川　陽子（OGAWA　YOKO）
松江工業高等専門学校・人文科学科・助教
研究者番号：　50512266

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世において王朝物語がいかに読まれたか、特に校合や付注といった研究的態度をもって享受された様相について、人的ネットワークの観点から考究した。中でも中世から近世、近世から近代（明治）という時代の過渡期における具体相に注目し、前者については里村紹巴によって三条西家の注が近世へ、また後者については物語目録作成者（本研究では特に黒川春村に注目した）によって和学者たちの研究が近代（明治）へ、それぞれ受け継がれる様相の一端を解明した。

研究成果の概要（英文）：How tales had been read at the early modern age was researched paying attention to the relation between people. Especially, the aspect at the transition stage in the age was clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,060,000	318,000	1,378,000
２００９年度	640,000	192,000	832,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　日本文学
キーワード：　連歌師、和学者、源氏物語古注、物語目録、風葉和歌集

１．研究開始当初の背景

本研究の前段階として、日本学術研究会特別研究員ＰＤとして、「王朝物語享受資料のデータベース化と享受ネットワークの解明についての研究」（18・11733）という研究課題のもと、研究活動を行なった。本来は2008年度までの３年計画であったが、特別研究員を中途辞退したことに伴い、同研究課題もまた中断することとなった。本研究は、遂行した２年間の研究を踏まえ、最終年度１年分の研究計画を修正、さらに発展させ今後につなげるべく、遂行したものである。

従来の物語研究において、『伊勢』『源氏』『狭衣』はともかくとして、その他の作品、中でも中世王朝物語と呼ばれる作品群については、その享受の具体相が明らかにされて

こなかった。しかし近年、近世における中世王朝物語の享受について、中島正二氏（『魚津シンポジウム』11〈平８・３〉ほか）・西本寮子氏（『国文学攷』178〈平15・６〉ほか）が繰り返し言及され、当該分野の研究の重要性が認められるようになってきた。

この状況を承け、前記研究課題において、複数の物語および物語目録その他の享受資料を総合的に扱う必要性を訴え、主に『源氏』成立以後の物語―平安後期物語および中世王朝物語―を対象として、[1]近世期の物語享受資料を調査、[2]資料のデータベース化を行なうことにより、[3]物語享受ネットワークを解明することを目的として研究活動を行ってきた。中でも[1]に重点を置いて、各物語の現存諸伝本、近世期成立の各物語注釈書類、近世期成立の物語目録類の調査を遂行した。

それらをもとに情報の分析・検討を行った結果、中近世期の物語享受を解明する上では、大きく３つが鍵となると考えるに至った。すなわち、Ⅰ中世末期から近世期の連歌師、Ⅱ物語目録作成者、Ⅲ近世期写本に残された中世期享受の痕跡、の３つである。本研究開始まではこのうち主にⅠⅡを対象として研究を行い、その成果を発表してきた。

２．研究の目的

王朝物語は、それぞれの物語生成時から現代まで、いかに読まれてきたのか。その享受史を解明し、物語享受を基軸として文学史・文化史を捉え返すことを、今後の研究目標としている。本研究はその一階梯として、主に連歌師と和学者（物語目録作成者）に視点を当てつつ、近世期における王朝物語享受ネットワークを解明することを目的とするものである。

従来の研究において、近世期の物語享受といえば版本ないし和学者に多く視線が向けられていた。しかしそもそも和学者はどこから物語写本を入手したのか。それを探るには、和学者以前と和学者周辺についての検討が不可欠である。

このうち和学者以前については、さまざま可能性が考えられるが、中世末期に連歌師里村紹巴や共に活躍した猪苗代兼如らの周辺で複数の王朝物語が読まれていたこと、近世に至っても兼如の後裔たる兼誼がいわゆる中村本『夜の寝覚』その他の物語を書写していること等から、本研究では連歌師に的を絞ることとした。

また和学者周辺については、これも多くの人物が想定されるが、複数の物語を扱っていること、研究的態度で物語に対していること等を鑑み、近世末期に物語目録を作成した人々を主たる研究対象に据えた。

３．研究の方法

本研究はフィールドワークによる典籍の実見調査を基本とし、その情報整理と解析のためにコンピュータを用いてデータベースを作成していった。典籍の調査については、大きく２つの軸を設けた。書物そのものと人物の２つである。

(1)書物＝物語享受資料

本研究では、物語享受資料として、

・各物語の現存伝本
・近世期成立の各物語注釈書類
・近世期成立の物語目録類
・『風葉和歌集』現存伝本

を主たる調査対象とした。調査対象の所在確認については、先に遂行した研究課題の成果を援用した。

(2)人物＝和学者、蔵書家、連歌師

紹巴・猪苗代家も物語目録作成者も、物語のみを興味の対象としていたわけではない。このため彼らの活動の実態を明らかにするために、物語以外の資料をも調査した。

４．研究成果

本研究では王朝物語享受者の中でも連歌師と物語目録作成者を主たる考察対象とした。このため、中世から近世へ（連歌師とその周辺）、近世から近代へ（物語目録作成者とその周辺）、という時代の転換期における物語享受を多く扱った。

(1)中世から近世へ

中世末期における平安後期物語ならびに中世王朝物語享受を具体的に示す資料がごく限られていることから、この時期については『源氏物語』享受資料を中心に検討した。

①三条西公条と紹巴

連歌師里村紹巴の物語享受、中でも注釈体系の継承を具体的に明らかにすべく、『源氏物語抄（紹巴抄）』を研究対象とした。

特に古活字本その他の奥書に名の見える三条西公条との関わりを、本文中の表現を手がかりに、公条の注釈書類と公条以後の注釈書類とを見合わせつつ検証した。その結果、紹巴は公条による複数の注釈体系を入手し『紹巴抄』に投影していることが明らかとなった。

さらに注目すべきは、この『紹巴抄』に見える公条注の一部が、これまでに知られている公条関連の注釈書ならびに三条西家直流

の注釈書類に存しないという点である。すなわち、公条が、従来知られているものとは別の注釈体系も有していたことが想定されるのである。加えて、その注が『紹巴抄』だけでなく、『湖月抄』の「師説」等にも重なっていることから、公条がいわゆる二段階伝授を行っていた可能性も考えられる。

公条の講釈をもととした注釈書は複数知られており、さらに近世に入って作成、出版された注釈書の中には公条の講釈を聞いた人物から相伝した注を核とするものが存する。今後、公条ならびに三条西家直流の人々による注釈書、そして『紹巴抄』、さらに地下の注釈書、中でも近世期の注釈書を対照していくことにより、中世から近世へ物語に関する知識がいかに継承されていったのか、その具体相を、従来想定されてきた以上に緻密な形で提示することが可能となると考えられる。

②一条兼良と有職家

中世から近世へ物語に関する知識が継承された一端を明らかにすべく、源氏学と分かちがたく存在した有職学という観点から検討を行った。

具体的には、宮内庁書陵部所蔵『源語装束抄并肖柏問答抄』を起点として、調査考察した。一条兼良の源氏学が、連歌師宗祇や宗碩を含めた後継者たちによって書名のとおり「装束」という側面に特化した形で受容された結果、近世において有職家たちに受容されたことを明らかにした。

平安後期物語および中世王朝物語の現存伝本の多くは近世写本であり、それらのもととなる伝本がどういう形で中世から近世へと受け継がれたのかは不明と言わざるをえない状況にある。そのような中で、『とりかへばや』あるいは『浜松中納言物語』が滋野井公麗ならびに野宮定之によって書写ないし所持されていたことが、近時、西本寮子氏によって明らかにされた（『国語と国文学』第 86 巻第５号〈平 21・５〉）。中世から近世にかけての物語享受と有職研究との関わりは、今後なお追求されるべき問題であるといえよう。

(2)近世から近代（明治）へ

①物語目録の隆盛と風葉和歌集

近世後期に複数の物語目録が作成された。それは決して偶然に同時期に作成されたのでなく、一定の人々の間で物語を総合的に扱う機運が高まり、その結果、互いに情報を交換しつつ持てる知識を目録という形に結実させていったものと考えられる。

そして物語を総合的に扱うようになった背景のひとつとして、『風葉和歌集』の書写と享受が想定される。物語目録を作成した人々の間では『風葉集』の貸借も大いに行われていたためである。物語和歌、それも近世期にはすでに散逸していた作品の和歌を数多く含む『風葉集』を丹念に写し、読み、その一方で複数の物語を書写、校合、付注していった結果として、複数の物語が総合的に扱われ、その総体としての研究書すなわち物語目録が作成されたことを明らかにした。

またそれを検証する過程で、『風葉集』の現存諸本ならびに『風葉集』の享受資料を博捜した。『風葉集』の所有あるいは貸借、活用の実態はこれまであまり解明されていない。しかし調査の結果、無窮会神習文庫蔵『風葉集類字抄』は、『風葉集』そのものを検討対象とした数少ない享受資料のひとつであること、『風につれなき』『八重葎』を書写したことで知られる会田安昌が書き入れを行なっていることがわかった。当時の『風葉集』享受の具体相を知る好資料と考えられるため、その他の『風葉集』伝本および和学者関連資料と併せ、今後さらに検討を進めることとしたい。

②黒川春村の達成とその継承

近世後期に複数作成された物語目録の中でも、黒川春村の成した『古物語類字鈔』は質量ともに群を抜くものであり、近世における物語研究のひとつの到達点といっても過言ではない。しかし実際のところ『古物語類字鈔』がどのように作成されたのか、またどのように利用されたのか、という問題については明らかにされてこなかった。この状況を踏まえ、『古物語類字鈔』の現存諸本ならびに関連資料を実見調査した。

その結果、春村は『古物語類字鈔』にたゆみなく手を入れていたこと、その増補過程を押さえることによって一部の物語については春村がいつそれを享受したかを特定できることが明らかになった。

また現存諸本と関連資料の書写者ならびに享受者を確認することにより、春村が和学講談所にて活動したことがその後の『古物語類字鈔』享受ひいては明治の物語研究に大きく影響したことが認められた。この近世から明治への知識の継承と物語研究の発展については、明治初期の大学教育等の問題も視野に入れつつ、今後なお検討を重ねることとしたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 小川陽子「黒川春村『古物語類字鈔』の発展」，『古代中世国文学』第 25 号，査

読無，2010 年，pp13-23

② 小川陽子「『源氏物語』と有職学―一条兼良から冬良、そして近世へ―」,『平安文学の古注釈と受容』第 2 集,査読無,2009 年,pp161-177

③ 小川陽子「『源氏物語抄（紹巴抄）』と先行注釈―三条西公条との関わりを中心に―」,『国文学攷』第 202 号,査読有,2009 年,pp33-45,
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00026853

④ 小川陽子「和学者たちの物語研究―物語目録の作成と『風葉和歌集』享受を中心に―」,『平安文学の古注釈と受容』第１集,査読無,2008 年,pp107-123

〔学会発表〕（計３件）

① 小川陽子「黒川春村『古物語類字鈔』について」，古典研究会，2010/3/22，福岡大学

② 小川陽子「『源氏物語抄（紹巴抄)』と先行研究―三条西公条との関わりを中心に―」，広島大学国語国文学会平成 20 年度研究集会，2008/11/23，広島大学

③ 小川陽子「『紹巴抄』と先行注釈」，12th International Conference of the EAJS ，2008/9/2，サレント大学（イタリア）

６．研究組織
(1)研究代表者
小川　陽子（OGAWA　YOKO）
松江工業高等専門学校・人文科学科・助教
研究者番号：　50512266

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし